

公共図書館は、より広く一般利用者に音楽情報のサービスを提供することを可能にする点で、社会的に重要な役割を担っている。音楽情報サービスを展開していくためには、国内外の様々な取り組みを把握する必要がある。日本の現状を報告することは、今後の国際的な情報交換の端緒となると期待している。

注1 発表のパワーポイント資料は、IAML Public Libraries Branchウェブサイトで見覧可能である。[http://www.iaml.info/organization/branches/public\\_libraries](http://www.iaml.info/organization/branches/public_libraries)

注2 文部科学省「平成16年度「子どもの学習費調査」2004年」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/006/05120501/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/006/05120501/003.htm) (last access 7/31/2007)

注3 ベネッセ教育研究開発センター「第2回子育て生活基本調査報告書」2002年、p. 69。 <http://www.crn.or.jp/LIBRARY/KOSODATE/KOSODATE3/HOUKOKU.HTM> (last access 7/31/2007)

注4 ピティナ「協会概要－協会データ」2006年。<http://www.piano.or.jp/info/data/index.html> (last access 7/31/2007)

注5 きかせてネット「「習い事」に関するアンケート」2002年。  
[http://www.kikasete.net/monitor/trend\\_watc](http://www.kikasete.net/monitor/trend_watc) (last access 7/31/2007)

注6 神奈川県立図書館「所蔵統計」[http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/riyou/17knrt\\_syozoutoukei.htm](http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/riyou/17knrt_syozoutoukei.htm) (last access 8/1/2007)

注7 愛知県文化情報センターアートライブラリー「利用案内」<http://www.aac.pref.aichi.jp/frame.html?bunjyo/alib/main.html> (last access 7/31/2007)

注8 民音音楽博物館「所蔵資料」<http://museum.minon.or.jp/material.html> (last access 7/31/2007)

注9 東京文化会館音楽資料室「音楽資料室のご案内－所蔵資料」<http://t-bunka.jp/shiryou/shozou.html> (last access 7/31/2007)

注10 全日本合唱センター資料室「概要」<http://www.jcanet.or.jp/center/index.html> (last access 7/31/2007)

注11 下記の資料に基づき、筆者が図を作成：愛知芸術文化センター『愛知県図書館事業年報』平成18年度。<http://www.aichi-pref-library.jp/nenpou/h18/h18nenpou.pdf> (last access 7/31/2007)

注12 トッカータ社内作成資料(私信)による。

注13 日本レコード協会「CDレンタル店調査」2006年度。  
<http://www.riaj.or.jp/report/rental/2006.html>(last access 8/1/2007)

注14 調査の報告は、下記の文献に詳しい：加藤修子「音楽分野における情報要求と図書館の利用：音楽研究者と演奏家の比較を中心に」『図書館学年報』vol. 36, no. 3, 1990, pp. 108-120.

松下鈞「音楽研究者の主題情報へのアクセス行動と音楽資料：音楽情報へのアクセスをめぐって」『情報の科学と技術』vol. 54, no. 7, 2004, pp. 363-370.

注15 国立国会図書館「レファレンス協同データベース」<http://crd.ndl.go.jp/jp/public/> (last access 8/1/2007).

### RISMプロジェクトの現状—アインジーデルン国際会議を中心に

樋口隆一 (明治学院大学)

2005年10月に明治学院大学で開催された日本音楽学会第56回全国大会において、筆者が「日本の音楽資料—収集・整理と研究」と題するシンポジウムを企画したのは、若手研究者の皆さんが、意外なほど「南葵音楽文庫」をはじめとするわが国の音楽資料の存在をご存じでないことに愕然とした経験があったからである。

幸い、シンポジウムの反響も大きく、「国際音楽資料目録」(RISM)への日本からの働きかけを、もっと活発にすべきだという意見が、各方面から聞こえるようになった。すでに国立音楽大学図書館は、長谷川由美子氏を中心に、同館所蔵の手稿譜や初期出版譜の書誌データをRISM本部に送られ、非常に喜ばれている。私自身もシンポジウムの準備作業から出発して主要資料を概観した「日本の洋

楽資料コレクション」(明治学院大学『藝術学研究』第16号、2006年、61-68頁)や、それを海外に知らせるために書かれた"Handschriften europäischer Musik in japanischen Bibliotheken"(Festschrift Otto Biba zum 60. Geburtstag, Tutzing 2006, S.665-670)のような仕事を重ねることができた。

2006年6月には、音楽文献目録委員会(RILM国内委員会)委員長としてヨーテボリのIAML国際大会に参加したが、RISMのセッションに顔を出したところ、『新バッハ全集』の関係で旧知のクリストフ・ヴォルフ教授が新会長(2004年から)として登場し、さらにはフランクフルトの本部の財政難が報告されたりして、RISMプロジェクトは私にとって急に目の離せない存在となった。そこでたまたま同年8月にDAADの招待で予定されていたドイツ公式訪問の日程に、急遽フランクフルトのRISM本部訪問も入れてもらい、クラウス・カイル所長からいろいろと苦勞話を聞いたりして、いまRISMプロジェクト全体が大きな変革の時期を迎えていることを実感できた。

ことし2007年は、まず7月1日～6日、シドニーでIAML国際大会があり、さらに7月10日～15日、チューリヒで国際音楽学会(IMS)の世界大会が開催された。RISMに関しては、シドニーでも報告会があったが、7月13日と14日の両日、チューリヒ近郊のアインジーデルンでRISM国際会議が開かれ、これにも招待されたので、はからずも両方に参加することができた。

アインジーデルン修道院は、かなり辺鄙なところがあるので、どうしたらよいのかと思っていたら、直前にスイス支部RISMからメールが入った。「8時12分チューリヒ発の汽車に乗り、ヴェーデンズヴィル駅で降りなさい。迎えを出すから」。半信半疑でそこまで行くと、知った顔がいたのでホッとした。RISM会長のクリストフ・ヴォルフ教授に、IMSチューリヒ大会の実行委員長であるチューリヒ大学のハンス・ヨアヒム・ヒンリクセン教授、そして6月にライプツィヒの『新バッハ全集完結記念式典』で会ったマインツ科学アカデミー連盟のガブリエレ・ブッシュマイヤー博士の3名であつ



アインジーデルン修道院

た。マインツ科学アカデミー連盟は、RISMプロジェクトのメイン・スポンサーである。

ヒンリクセン教授とは、昨2006年9月にウィーン・シェーンベルク・センターで開催されたシンポジウム「シェーンベルクとモーツァルト」で知り合ったばかりだが、なんとスイスRISMの会長も兼ねているという。つまりわれわれ4人だけがチューリヒのIMSとの掛け持ち組だったわけだ。用意されたタクシーでアインジーデルンに着くと、RISM事務局長のヴォルフ・ディーター・ザイフェルト氏と、スイスRISM所長のガブリエラ・ハンケ・クナウス博士が待っていた。話してみると、ザイフェルト氏は、ミュンヘンのヘンレ出版社の社長だそう。そういえばRISMのカタログはヘンレ社から出ている。



左から筆者、ハンケ・クナウス(スイスRISM所長)、ヴォルフ(RISM会長)、ヒンリクセン(スイスRISM会長)、ブッシュマイヤー(マインツ科学アカデミー連盟)

修道院内に用意された会議室に行くと、すでに30数名の参加者が待っていた。彼らは前

日から来て、現地のホテルに泊まっていたのである。名簿を見ると、さすがに主催国スイス各地からの参加者が多いが、パリ、ルーヴァン、ワルシャワ、グダニスク、ミュンヘン、ドレスデン、南チロルのランゲン、インスブルック、プラハ、ブラティスラヴァ、ストックホルム、ルガノ、デン・ハーグ、モスクワからも来ている、アメリカはヴォルフ会長とアリゾナ州立大学のジョン・ハワードの二人だけだった。つまりこの日は、各支部の代表者のみの内輪の会だったようである。日本はまだ支部がないので多少肩身が狭かったが、ヴォルフ会長からは「日本から来てくれたのは初めてだ」といわれ、皆さんからも非常に歓迎されたことだけは確かである。

主催者であるスイスRISM会長のヒンリクセン教授とRISM会長のヴォルフ教授の挨拶の後、スイスRISMのハンケ・クナウス所長が手短かにこの国際会議の趣旨について述べ、フランクフルトのRISM本部所長のカイル氏による基調報告に入った。その要約は次の通りである。



1) フランクフルトのRISM本部は1980年以來、その財源を主としてマインツ科学アカデミー連盟から得ている。同連盟は一時、2008年度をもってRISM本部への補助金の支給中止を打ち出してきたが、折衝の結果、かなりの縮小を前提に継続が決定した。しかしこれは2009年度以降の人員削減を意味し、本部の活動内容に変化を余儀なくされる。

2) 新しい入力プログラム「カリスト」Kallistが開発された。これによって、各支部は本部とインターネットを通じて直接連絡を取りながら入力作業を行うことができるう

え、支部間の情報交換も可能となる。「カリスト」の機能を解説するチュートリアルも開発中である。

3) Serie A / II: 「1600年以降の手稿譜」Musikhandschriften nach 1600 のCD-ROMの新バージョンは、2006年末にK.G. Sauer-Verlagから出版されるが、おそらくこれが最後の出版となる。同様に、NISCによるインターネット版データベースも同年末にアップデートされる。

4) Serie A/IIのデータベースを、バイエルン州立図書館による「ヴァーチャル音楽学図書館」([www.vifamusik.de](http://www.vifamusik.de))を通じて無料配信することを決定した。実現は2009年を目標としている。

以上はすでに、2007年4月のニュースレターによっても発表され、シドニーでも報告されたが、アインジーデルンでは特に「カリスト」についてより詳しい説明があり、その後の討論では、フランスとアメリカの代表から従来のシステムからの移行に関する不安が表明された。しかしそうした点も十分に考慮したとの回答ではあったが、まだ現物がない以上、いわば「絵に描いた餅」についての議論でしかない。

帰国後、RISMのサイトを開いたところ、(2)の「カリスト」のチュートリアルと新しいマニュアルがアップされていた。筆者は昨年フランクフルト訪問の際に、カイル所長より旧版のマニュアルを入手し、明治学院大学大学院芸術学専攻博士後期課程のゼミで、ドイツ人聴講生を含む大学院生たちとその日本語訳を試み、そのあまりの煩瑣さに難渋していた。しかし新しい「カリスト」のマニュアルは、ずっと簡潔で分かりやすい。秋学期からはこの新版の翻訳を進めることにした。

修道院食堂でのおいしい昼食の後、午後のオープン・フォーラムに入った。すでに立派なデータベースを独自公開しているスイスRISMによる「スイスRISMデータベース」作成についての発表、西オーストリア・南チロル支部による同地方の資料に関する発表を聴いて休憩に入ったが、筆者はヴォルフ会長とともにチューリヒ大学へと向かった。5時からIMSの総会があり、筆者は金澤正剛教授の後任として日本代表理事に選挙されたからである。



修道院食堂での昼食です。野菜スープと豚肉のロースト。田舎料理がおいしかった。

翌14日(木)は、"IMS in Einsiedern"と題された学会の遠足があり、こんどはバスでインジーデルンへと向かった。金澤先生とご一緒に参加したのは「資料の解明と応用的研究—RISMの仕事に基づいたプロジェクトと研究成果」と題したセッションで、9時30分から12時半頃まで、非常に充実した発表ばかりを楽しむことができた。

聖歌断片の記述の問題、パレストリーナの作品目録の問題、ソレルのオペラ"Una cosa rara"の影響史を資料的に解明する試みに続いて、スイスRISMのハンケ・クナウス所長が発表したのは、《フィガロの結婚》の"Contessa perdono"を修道院で上演するために"Gloria Patri gloria filio"に改作したという興味深い資料についてであった。

RISMであれRILMであれ、カタログ作りだけでは補助金が出にくいのはどこの国でも同様らしい。スイスRISMは、カタログ作りの応用として可能な音楽学の研究プロジェク

トを立ち上げることによって資金調達も行っているようだ。学ぶところが多いと思った次第である。それはまた音楽学者と音楽司書の有機的な連携を前提としている。これもまたわが国の今後の課題である。

ホテルでの昼食の後は修道院の見学。特に、修道院図書館で披露された聖歌の資料は興味深かった。修道院の大広間で行われたバーゼルの若い古楽器奏者たちによる音楽会



古い聖歌集を前に、左端は聖書研究の権威ユグロ教授

では、午前中の発表で紹介された《フィガロ》の改作など、スイスの修道院ゆかりのレパートリーが並び、音楽図書館学と音楽学、そして古楽演奏の理想的な連帯が示された。

チューリヒ大学で開催されたIMSの世界大会のテーマは「推移」Passagen。例によってもものすごい数の発表が行われたが、筆者は自分の専門に近い「バロック・オペラ」や「1700年前後の教会カンタータ」などのセッションに参加して学ぶところが多かった。久しぶりのドイツ語圏での大会ということもあ

り、ドイツの若い世代の研究者たちが大勢やってきて、新しい研究成果を披露してくれたし、日本からも若手中心になんと7名も発表があったというのも嬉しいかぎりだ。『新MGG』の完結記念式もあり、ベーレンライターの社長夫妻とも初めてお話しすることができた。6月には『新バッハ全集』と『新モーツァルト全集』の完結記念式典がそれぞれライプツィヒとザルツブルクで行われたこともあり、音楽学そのものも「推移」の時代



修道院教会の天井画。本当は撮影禁止だけどきれいでしょ？

にあることを実感した。